

「教科書の内容に一步踏み込んだ言語活動を目指して」

～メモに基づくスピーキング指導～

秋田南高等学校中等部 教諭 吉澤 孝幸

1. 「教科書の内容に踏み込む」とは？

教科書本文と言語活動との関連を考えた時、ともすれば教科書本文の意味を理解すること自体が目的になり、その後の言語活動は「付録」的な扱いになることはないだろうか。むしろ、その単元の最終目標として設定する言語活動を達成するために必要な「情報」や「言語形式」を教科書から得ることが望ましいと考える。本実践において「教科書の内容に踏み込む」とは、教科書的话题をきっかけにして単元のゴールとなる言語活動を行うことと考えている。

2. なぜ、内容に踏み込んだ言語活動を行うのか

教科書の目標文を扱う授業では、目標文を用いての言語活動が行われ易いが、教科書本文を主体とする授業の場合でも、同等に言語活動が行われているか振り返ることは大切である。読んだ内容に基づいた言語活動を十分に行うことで「目標文を扱った授業では言語活動が行われるが、本文を扱う時はどうしても理解が中心」という状態から脱却し、「教室」という言語使用域を「コミュニケーションの場」として最大限に活用することにつながると考えている。

このことは、新学習指導要領解説の「言語活動の使用場面の例」において（ア）と（イ）の項目が従来のものと逆になった理由の一つとも軌を一にするものである。また、目標文を扱う言語活動では、特定の言語形式に意識が届きやすいが、読んだ内容に基づいて行う言語活動では、その時点で生徒が身に付けている知識や英語力を総動員しなければならず、使用する表現も多様になるためその形式にも意識が届きにくくなる。そのような場面こそ、生きた情報（内容）を伝えながらも、言語形式にも意識を届けさせる良い機会にもなると考える。

3. 手段としての「メモに基づくスピーキング」

本実践は、読んだ内容に基づいて言語活動を行うことに焦点を当てている。これは「読むこと」と「話すこと」を統合した言語活動であり、目標とする活動を「限られた時間」で行うこととしている。本時の言語活動の骨子は、次の通りである。

与えられた英文の落としてはならない情報を、自分で作成したメモに基づいて口頭で要約することができる。

その上で



英文の内容に対する感想や意見、関連した経験などの伝えようとする内容を整理し、自分で作成したメモに基づいて口頭で伝えることができる。

将来的に即興で自分の考えなどを伝えることができるようになる段階を見据え、その「橋渡し」の役割を果たす手段として、「メモに基づくスピーキング」を本校では、中学1年次より取り入れてき

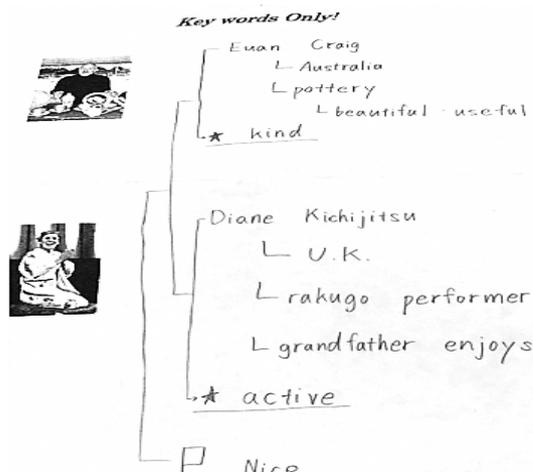
た。限られた時間で、伝える内容を整理するための手段として用いたステップは次の通りである。

① 伝える内容を整理する。

② キーワードでメモを構成する。

③ 頭の中で英文を構成し、伝える。

④ 的確に伝えられなかった部分を書いて修正する。



<メモの作成にあたって>

メモ書きを作成するにあたり1年次後半から2年次中盤には、問いに対する答えをキーワードとしてメモを作成する観点を与えた。

また、読んだ内容を伝える場合、同じ英文を読んでいるので、表現形式は異なるものの内容をすでに知っている中での言語活動になりがちである。このことを解決するために、手元に形容詞の一覧表をもたせ、最後に付け加えるように指導した。形容詞は、人の価値観を表すことから、中学1年生であっても、形容詞1語を付け加えることで自分の価値観を表してスピーチすることが可能になる。

<メモを基に発話する際に>

発話の流れを決める。

現行の教科書は1年生の題材といっても英文量は多い。全てのセクションを見渡せるように地図をイメージし、情報が階層化されたメモの作成を指導している。

<キーワードを階層化して配列する>

最も階層が上のキーワードのみ頭に入れればスピーチの形になるようにする。

詳細は、その場で想起したことを述べることでOKとする。再話のように、英文の断片を再生するのでなく、英語話者のロジックに沿って話すことの重要性を理解させる。

<何かを言ったら、必ず補足（詳細情報）を入れるようにする>

階層的なメモを基に概要を伝える経験をすることで、いきなり新規の話題について話す時も、必ず何か言ったら詳細を加えて、説明する習慣を形成させる。

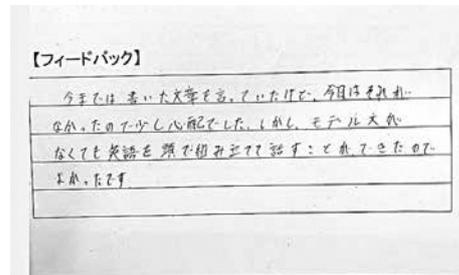
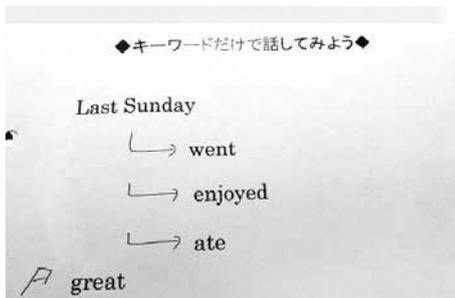
<形容詞を有効に活用する>

形容詞を配置するにもいろいろバリエーションがあることを示す。

- ・形容詞1語
- ・プラスイメージ形容詞 and プラスイメージ形容詞
- ・マイナスイメージ形容詞 but プラスイメージ形容詞

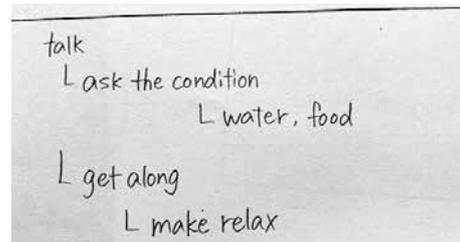
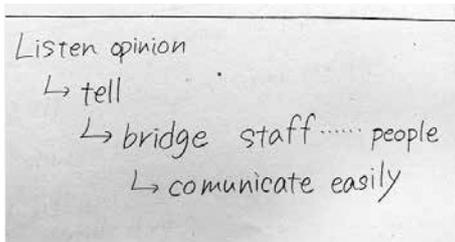
<中1 はじめてのキーワードスピーキングと感想>

教科書の英文をもとに、キーワードを教師が抜いておいて、それを基に「自分の体験」について限られた時間で話す内容を構成して、伝え合う活動を行った。「モデル文なしで」と「組み立てて話す」という視点が生まれた様子がかうかがえた。



<中3 1分で話す内容を組み立てる>

教科書単元の冒頭にある「問い」(How can you help each other in a shelter?)を問いかけ、自分の意見を1分で構成させた。対象が3年生なので、敢えて細かい手順は踏まず“Keyword Only!”の一声で活動に入らせた。グループで伝え合させた後に、クラス全体で共有した。



I listened to the opinions of people in need.
I think I should tell the staff members about their opinions. I can become a bridge between the staff members and people there.
That will help them communicate easily.

※2つとも原文ママ



I will talk to foreign people. I will ask them about their conditions. For example, I will ask them, “Do you have enough food and water?” Also, I want to get along with them by talking with them a lot. We can be friends even if we have a conversation enough. I want to make them positive and relaxed.

4. 「真のやり取り」を

英語が口から出てこないで、「う～ん」と手を動かしながら、単語を言う。発話は、1語であるにもかかわらず、聞き手が「こんなこと？」と確かめる。それに対して、「そうそう。それぞれ。」という表情で応じる。生徒の持つ英語力と経験を総動員して行う情報交換こそが「やり取り」を真正にする。

予想外の展開になった時こそ、絶好のチャンスである。教師も生徒も真剣勝負である。「振り返って、もう一回やってみよう」からは生まれえない、新鮮さや動機づけがそこにはある。情報と場面の新鮮さこそが、英語に対する生徒の「気付き」を促すと感じている。

A: What kind of student are you?

B: I am a friendly but quiet student.

famous		brave		amazing
happy		busy		boring
excited		cool		angry
exciting		careful		sleepy
hard		clever		simple
healthy		convenient		soft
wonderful		interesting		tired
warm		interested		nervous
weak		equal		surprised
tall		hungry		proud
difficult		dangerous		strange
funny		kind		lucky
great		active		smart
important		cheerful		professional
traditional		necessary		rich
favorite		pretty		safe
cute		skillful		perfect
beautiful		impossible		quiet
terrible		popular		helpful
right		unique		shocked
surprising		friendly		useful